

氏 名：江 見 香 月
学 位 の 種 類：博士（看護学）
報 告 番 号：甲第110号
学 位 記 番 号：博第107号
学位授与年月日：令和5年3月15日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目：認知症の母親を介護する息子の体験
Sons' Experiences in Caring for Their Mother With Dementia
論 文 審 査 員：主査 川 原 由佳里
副査 坂 口 千 鶴（正研究指導教員）
副査 小 宮 敬 子（副研究指導教員）
副査 田 中 孝 美
副査 吉 川 悦 子

論文審査の結果の要旨

審査の概要

本研究は、認知症患者への家族介護の実態を、特に母親を介護する息子に焦点をあてて、明らかにしたものである。負担が重いにもかかわらず社会的に十分知られていない認知症の介護に焦点を当てた点、また男性としての社会的な立場や役割、ジェンダーを携え、母親の介護を行う負担や、それを誰かに打ち明け、積極的に支援を求めることが少ない息子に焦点を当てた点で、本研究は、認知症高齢者の介護という現代的なテーマのより際立った側面を扱ったものであり、従来の研究に加えて、母親の病状が進行していくなかでの息子の体験を明らかにした点でオリジナリティを有するものとなった。

研究では、認知症である母親を6か月以上介護した経験のある5名の息子へのインタビューが行われ、語りが分析された。それまで頼りにし、尊敬していた母親が変貌していくことへのショック、進行を食い止めるべく試みても思うようにはならないことでの落胆、だんだん激しくなっていく言動への戸惑い、本心ではしたくないという気持ちを押し殺しての排泄ケア、そして母親本人の意向を汲むことができないまま施設への入所を決める苦悩などの体験がリアルに描かれている。そのような苦渋に満ちた介護のなかでも、研究参加者からは母親との間で切なくも温かいやりとりがあったこと、短くとも母親が安心して暮らせた時期をもてたことなどの語りがあり、自身が行った介護の意味を見出そうとする姿も明らかになった。また介護を通じて、大人になるまで分からなかった母親の苦労に思いを馳せる者、わだかまりを解いてできるかぎり母親の自由にさせてあげたいと考え介護を続ける者もいた。

本研究ではほぼ全ての参加者が、ぎりぎりまで葛藤しながら介護を続け、施設入所を決めた後もそのことに罪責感を抱いている実態も明らかになった。母親を慮るばかりに、認知症であることを母親本人に告知せず、それゆえに気持ちを伝えたり話し合ったりできないまま介護を続けている状況や、母親本人が望まないという理由で妻や他のきょうだいに介護を頼むことが難しく、外部の支援を得られない状況が明らかになっている。考察では、その背景となる社会の変化とともに、これらにより、母親を介護する息子が孤立しがちな状況で介護を続けている実態が考察され、支援の在り方が検討されている。

全体を通して本研究は、あまり表現しないとされる男性介護者から、日々の介護のなかでの出来事だけでなく、そこでの思い、母親との関わり、母親の人生の物語までを聴き取ることができている点で評価された。また認知症の家族介護の大変さとそれを引き受けることで得られる体験には、従来の研究と共通する点もある一方で、先に述べたような息子があまり気持ちを表現せず、支援を求めることが難しい背景についての新たな知見も明らかにされている。本研究の結果については、中等症までの認知症の母親を介護する限られた年齢層にある息子が研究参加者となったという限界はあるものの、認知症介護にあたる当事者の貴重な体験を明らかにしたものであり、彼らを理解し、寄り添い、支援をするうえで役立つものとなると考えられる。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。